

夏至儀式

I O S 儀式魔術文書 S O 2



THE OFFICIAL ORGAN
OF
I O S

PUBLICATION IN CLASS D
IMPRIMATUR : M FRATER I O S

THE SUMMER SOLSTICE CEREMONY FOR GROUP WORKING
I O S RITUAL MAGIC WORKING

目 次

- 第 1 章 解 説
 - 1 司官の配置
 - 2 儀式場の準備

- 第 2 章 開 式
 - L B R P / L B R H
 - 浄化 / 聖別
 - 四門の開放
 - 竜の周行
 - 宇宙の主の讃歌

- 第 3 章 冬至祝祭
 - 諸神の召喚
 - 二つの門
 - 聖 餐
 - 宇宙の主の讃歌

- 第 4 章 閉 式
 - 浄化 / 聖別
 - 諸神への賛辞
 - 竜の逆周行
 - 宇宙の主の讃歌
 - 四門の閉鎖
 - L B R P / L B R H

All rights reserved. Copyright C 1995 by I O S

No part of this text may be reproduced or transmitted in any form or by any means, electronic, mechanical or spiritual, including photocopying, recording, psychometry or by any information storage and retrieval system, without permission in writing from the Order.

第1章 解 説

本儀式は、小規模な団内グループ(ロッジ単位程度)が比較的簡易な準備で行えることを前提に作成した。従って、《黄金の夜明け》団などで執拗なまでに追求された儀式のシンメトリーや細部の精密さに欠ける部分があるかもしれない。しかし、本儀式においては、豊潤な虚飾より実践的簡潔さを、正確で冗長な記述より、瞬間の真実と実効性を追求した。

夏至は6月21日前後に到来する。『天文年鑑』等で、何日の何時に夏至が訪れるか確認し、儀式の日取りを決定しなければならない。参加者の参集の便を考えて、なるべく夏至の前後48時間以内に儀式の日時を定めておくこと。

天文学的には夏至というのは太陽の黄経が90度になる瞬間だが、その赤緯は最も高く、ちょうどヘラクレス座の棍棒、または双子座の足のあたりで赤北23度半になる。太陽はまさに銀河の帯を通過し、銀河中心の反対方向で最も熱を放つのである。(北半球の場合)

さて、魔術的な意味では、夏至は太陽がその頂点に達するときである。そのため世界の各地で火の祭りが行われる。炎の熱と光で黄金の太陽を称えるのである。しかし、夏至という瞬間は太陽の熱が《増大》から《減少》に変化する瞬間でもある。従って、この祝祭のもうひとつの意味は「生命のなかの死」である。ガードナー派の魔女は、この点を強調して成長する太陽の象徴であるオーク王の死を演じる。《黄金の夜明け》団では、夏至の儀礼はなかった。しかし、今日の魔術団体は殆どが四季の儀式を導入している。

ここに紹介する魔術儀礼は、カバラ/グノーシスの神話体系を導入したI O S オリジナルである。南方に召喚される《火の主》すなわち《南の生まれなき者》は、ズルヴァン教の太陽神コスモクラートル=ミトラである。かれは牛を屠る者、不敗の太陽等と呼ばれる古代の太陽神であるが、宇宙の摂理そのものを体現する《名なき者》の具象化でもある。

また、本儀式では、立体天球の北極を取り巻く《大なる竜》の力を召喚する。従って儀式の最初と最後にハイエロファントは、自己の責任で小五芒星及び小六芒星の追儼儀式を行わねばならない。竜を伴う関係上、五芒星儀礼は《エジプト式文》を行う必要がある。六芒星儀礼は『スター・サファイヤ』のラテン語版を記述した。四方位を竜の開門で開き、「生まれなき者」の儀式により《三重に偉大なる者》《驚の神》を召喚する。

1 司官の配置

本儀式に必要な最低の人数は4人である。(ハイエロファントがヘゲモンを兼ね、儀典司官がいらない場合。)通常は8名の司官を選定する。司官以外の参加者は、何人でも可能であるが、グループの大きさに応じて適当な場所を選ぶ必要がある。

司官、参加者ともに可能ならば、法衣を纏う。通常は、位階の指定色、《黄金の夜明け》では第1団は黒、第2団は白であるが、特殊な神殿の場合はこの限りではない。

司官8名の体現する象徴、神、魔法武器、役割などは以下のとおりである。

《ハイエロファント=豊=ラー・ホール・クイト神》

魔術剣と鈴を携え、神殿を初期化し、儀式全体を執行する。

《ヘゲモン=風=ネフティス女神》

短剣を携え、東の場を設定し、イシス神に神問いを行う。

《ダドウコス=火=セト・テュフォーン神》

杖を携え、神殿を火で聖別し、南の場を設定する。

《ハイエレイア=水=イシス女神》

杯を携え、神殿を水で浄化し、西の場を設定し、イシス神の媒体となる。

《ストリストリア=地=オシリス神》

アंकを携え、北の場を設定する。

《儀典司官 = トート神》

儀式文書を携え、儀式の節目に発言し、不測の事態に当たっては司官及び参加者を誘導する。その役目は儀典官 (Protocolor)、後見人 (Prompter)、先唱者 (Precentor) である。

《門番 = アヌビス神》

黒杖を携え、神殿の門を守る。境界の右の守護者

《警衛 = セベク神》

剣または槍を携え、神殿の門を通過する者を脅かす。境界の左の守護者

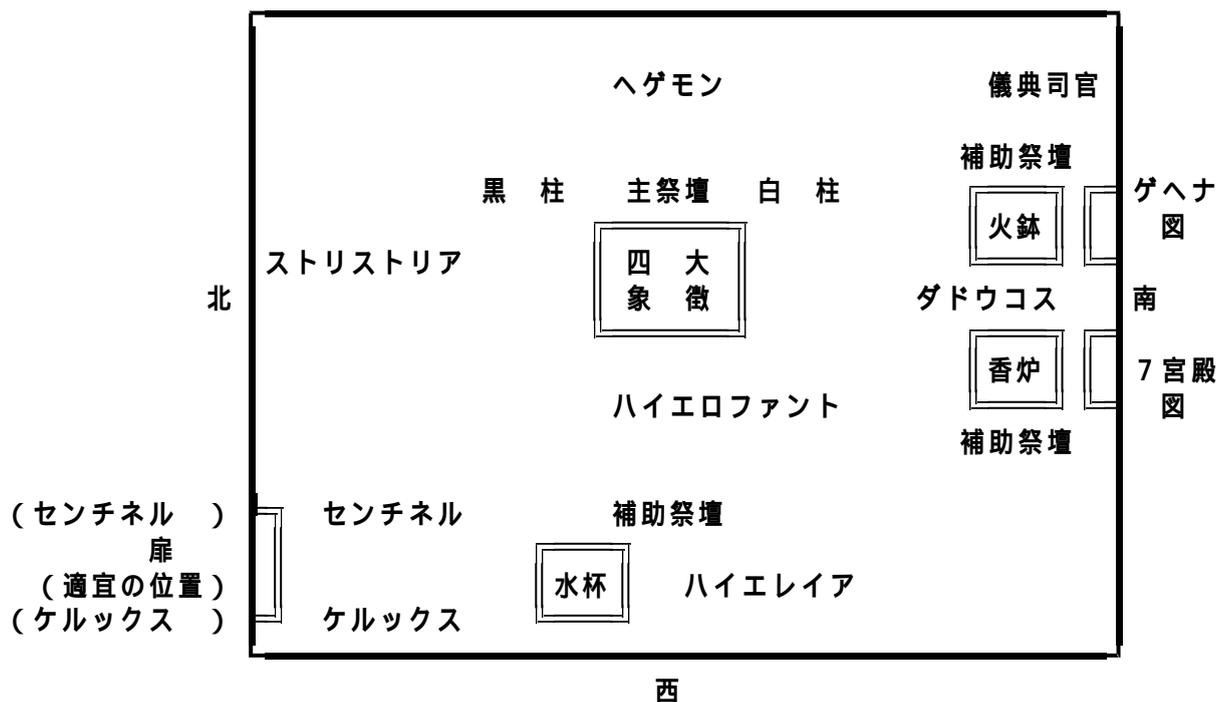
2 儀式場の準備

完全な形の神殿を準備することは不可能である。地上の神殿は、アストラル神殿を誘引するための道具立てなので、要点を押さえる形で器材を配置する。次に述べるのは、魔術の神殿において通常配置される主要な器材であるが、総てを揃える必要はない。グループで準備できる範囲で、儀式の場所に適合した器材を準備すれば良い。それが無理な場合は、ただの部屋を何の粉飾もせずを用いる場合もある。

神殿は薄暗くしておく。儀典司官は書物を読むために、必要な携帯灯火を用意しておく。

《神殿の配置》

東



西

《祭壇》

理想的には、二重立法祭壇を準備する。《黄金の夜明け》式の黒、セフィロト配色、その他の神殿固有の色調等を用いる。普通の机を用いる場合は祭壇覆いをかけて代用する。祭壇は部屋の中央に据える。本儀式においては、南と西に補助祭壇を設けて、神殿を清める香炉に水杯 (ゴブレット) を置く。夏至の場合は、南の補助祭壇は司官の椅子を挟むようにして二つ必要である。その上の香炉と火鉢には、ハイエロファントが LBRP 及び LBRH を開始する以前に点火しておくが、儀式の最中に燃え尽きてもそのままが良い。水杯には十分な塩水を入れておく。

《柱》

ヤキンとボアズの二柱を準備する。できない場合は、想像力で補う。神殿の正面を東とし、東の壁のさらに彼方に、右に白く輝く象牙の柱、左に黒光りする黒檀の柱を視覚化する。

《椅子》

四方位の壁の中央に椅子を置き、四方司官の座とする。ハイエロファントと儀典官には椅子はない。参加者の椅子は適宜配置する。部屋の構造が四方位と対応していないときは、儀式的な東方の壁を最初に定めて、そこから東西南北を規定する。四角形ではない部屋を用いる場合は、その構造に応じて配置する。

《四大旗》

該当する方位の壁に下げる。『エゼキエル書』に現れるケルビムを表象する旗、絵画、彫像、或いは記号を表示すれば良い。準備できなかった場合は、参加者全員が鮮やかに視覚化できるように言葉で誘導する。

《小物》

四大を象徴する魔術用具、東 - 剣、南 - 杖、西 - 杯、北 - 塩の皿、等に加え、鈴、キャンドル、香炉や各種魔術武器等を可能な限り準備する。これも代用品を探すことは可能である。

第2章 開式

参加者は別室で法衣を着用する。(状況により平服で行う場合は、なるべく黒または白系統の模様のないシンプルな服装を用意する。長袖、長パンツ、ロングスカート等のなるべく肉体を覆い隠すものが良い。しかし、奇をてらってはいけない。)

法衣の着用が終了したら、沈黙し儀式の背後にある意味を黙想しつつ待つ。

ハイエロファント(Ht)が最初に入場し、室内で小五芒星追儼儀礼(エジプト式文)及び小六芒星追儼儀礼を行う。

次のごとく《竜の十字》を切る。両腕を上げ掌を上に向け、頭は上空を仰いで言う。

「A B R A K A D B R A (アブラ・ハダブラ)」

両腕を降ろし掌を下に向け、背筋を伸ばしたまま、頭を垂れて言う。

「T h L I (テリ)」

頭を正面に向け、左手で右肩に触れて言う。

「V B R C h (ヴェ・バレアク)」

左手をそのまま、右手で左肩に触れて言う。

「V O Q L Q L V N (ヴェ・アカルケロン)」

両手を肩から胸に滑り降ろし、両腕を十字に組み言う。

「O L B L I M H (アル・ベリマー)」

東に行き、地の追儼の五芒星を描き、中心を指し、次を唱える。

「H R V - R A - H A (ヘル・ラ・ハ)」

南に行き、五芒星を描き、中心を指し、次を唱える。

「A P V - P R S h (アポ・フラス)」

西に行き、五芒星を描き、中心を指し、次を唱える。

「A S T h - R N N V T h (アスト・レンヌース)」

北に行き、五芒星を描き、中心を指し、次を唱える。

「A S R - V N - N P R (アサル・ウン・ネフェル)」

東を通過し、中央に戻る。

両腕を広げ、次を言う。

「我が前に、H R V - M A K H I S (ヘル・マクス)

我が後ろに、H R V - A M O V N (ヘル・アモウン)

我が右手に、H R V - M H N T V (ヘル・メントゥ)

我が左手に、H R V - K H O N S V (ヘル・コンスー)」

「A - H - A (アスト・ヘル・アサル)」

「我がうちに、静寂と力の星たる五芒の線が燃え、

柱のなかに、真夜中の太陽たる六芒の光が輝く。」

再び、《竜の十字》を切る。

中央でL V Xのサインを行う。

東に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「P A T E R E T M A T E R U N U S D E U S A R A R I T A 」

南に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「M A T E R E T F I L I U S U N U S D E U S A R A R I T A 」

西に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「F I L I U S E T F I L I A U N U S D E U S A R A R I T A 」

北に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「F I L I A E T P A T E R U N U S D E U S A R A R I T A 」

中央に戻り、薔薇十字を描く。

「A R A R I T A A R A R I T A A R A R I T A 」

トライデントのサイン、引き続き両手を王冠に添え、大地に落とす。

「OMINA IN DUOS DUO IN UNUM : UNUS IN NIHIL :
HAEC NEC QUATUOR NEC OMNIA NEC DUO NEC UNUS NEC NIHIL SUNT.」
「GLORIA PATRI ET MATRI ET FILIO ET FILIAE ET SPIRITUI SANCTO EXTERNO ET
SPIRITUI SANCTO INTERNO UT ERAT EST ERIT IN SAECULA SAECULORUM
SEX IN UNO PER NOMEN SEPTEM IN UNO ARARITA.」
L V Xサインを行う。

杖をもつケルックス (K x) と剣または槍をもつセンチネル (S e) は、扉の外側で左右に別れて立っている。Mの鈴の合図の鈴 (銅鑼) で入室を開始する。最初にケルックスが入室して右側に立ち、続いてセンチネルが入室して左側に立つ。他の司官及び参加者は、この二人の間をくぐり、儀典司官 (P t)、ヘゲモン (H g)、ダドウコス (D d)、ハイエレイア (H r)、ストリストリア (S t)、その他の参加者 (東南西北側) の順で入室する。

それぞれは入室する際にセンチネルに剣を突きつけられ、ケルックスの耳にロッジのパスワードを囁かねばならない。ケルックスは正しいパスワードを聞いたなら頷いて、先に行かせる。センチネルは参加者の人数を確認する。

H t : 「ケルックスよ、全ての者が正しいパスワードで応じたか。」

K x : 「全てパスワードを告げし者なり。神殿の首領よ。」

H t : 「センチネルよ、参集すべき者は集まりしか。」

S e : 「呼集されし者すべて集いたり。神殿の首領よ。」

ハイエロファントは、祭壇の西に立ち東を向いて言う。

H t : 「ヘカス ヘカス エステ ベベロイ
I O S . . . の兄弟姉妹たちよ。われらこの場に神殿を開かん。」

P t : 「水と火の浄化」

H t : 「ハイエレイアよ、神殿を水で浄化せよ。」

ハイエレイアは、盃を祭壇のゴブレットに持ち替え、東から始めて、右回りに四方点で外側に面して、指を塩水に浸して十字を切った後、三角形を描く。終了後、自分の場で宣言する。

H r : 「神殿を水で浄化した。」

H t : 「ダドウコスよ、神殿を火で聖別せよ。」

ダドウコスは、杖を祭壇の香炉に持ち替え、東から始めて、右回りに四方点で外側に面して、薫煙の十字を切った後、三角形を描く。終了後、自分の場で宣言する。

D d : 「神殿を火で聖別した。」

P t : 「四門の開放」

ハイエロファントは、両手を目の前で左右に広げる《ヴェールを開く》合図を行う。

ヘゲモンは、東に面し、魔術剣で「風旗」を指し、次を唱える。

H g : 「EX ARP XFA IO AAI TI RIT OL POLIP」
(イクス・アール・ペー イクス・ファー イー・オオー アアー・アアー・イー
ティー リー・テー オオー・レエー ポオー・イー・レー・ペー)

ヘゲモンは、風の召喚の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

H g : 「見よ、渦巻く風を。内奥にありしものは、慈悲と識見もて外側に開かれん。
われ、風の門を開きたり。」

P t : 「神殿の東に注目されたい。物質の壁のすぐ後ろに、高さ約2メートル、幅約1メートル

の紫色の微光を放つ空間が風の門として開いた。その門の彼方から黄色の光の筋が幾本も差し込み門の中央に黄色い光の球を造る。その輝きがヘゲモン、すなわち空間の君主（貴婦人）を貫き、ヘゲモンの全身は黄色い輝きに包まれる。その様子を心の目で見よ。いまや、風の元素が疾風と化して吹き込んでくる。冷たく激しい風が門をとおり、門の前に刻み込まれた五芒星と六芒星をくぐり抜け、黄色い指を伸ばして門と祭壇をむすびつけ、祭壇に風の霊が凝集する。」

ダドウコスは、南方を向き、杖で「火旗」を指し、次を唱える。

D d : 「 B I T O M I A I A L T I A D P O A D P R M L P R G 」
(ビー・トォー・エエム イイー・アァー イイー・アァー・レェー タァー
イイー・アァー・デェー・ペー オォー・アァー・デェー パァール
エム・レェー・パァール・ゲェー)

ダドウコスは、火の召喚の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

D d : 「見よ、逆巻く炎を。主の御手にほむらは戯れ、真実を糧に輝く。
われ、火の門を開きたり。」

P t : 「神殿の南に注目されたい。物質の壁のすぐ後ろに、高さ約2メートル、幅約1メートルの緑色の微光を放つ空間が火の門として開いた。その門の彼方から真紅の光の筋が幾本も差し込み門の中央に赤い光の球を造る。その輝きがダドウコス、すなわち炎の君主（貴婦人）を貫き、ダドウコスの全身は赤い輝きに包まれる。その様子を心の目で見よ。いまや、火の元素が炎の固まりと化して差し込んでくる。強烈な熱波が門をとおり、門の前に刻み込まれた五芒星と六芒星をくぐり抜け、真紅の指を伸ばして門と祭壇を結びつけ、祭壇に火の霊が凝集する。」

ハイエレイアは、西方を向き、杯で「水旗」を指し、次を唱える。

H r : 「 H K O M A K N I L A O I O D I M L D O T A A I T A 」
(ヘイ・コー・マー ケー・ニー・ラー オォー イイー・オォー・ディー
エム エル ドォー テェー アァー・アァー・イイー タァー)

ハイエレイアは、水の召喚の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

H r : 「見よ、ざわめく海を。わが真実の名前が漂う、わが内部の血潮よ。
われ、水の門を開きたり。」

P t : 「神殿の西に注目されたい。物質の壁のすぐ後ろに、高さ約2メートル、幅約1メートルのオレンジ色の微光を放つ空間が水の門として開いた。その門の彼方から青い光の筋が幾本も差し込み門の中央に青い光の球を造る。その輝きがハイエレイア、すなわち綿津見の君主（貴婦人）を貫き、ハイエレイアの全身は青い輝きに包まれる。その様子を心の目で見よ。

いまや、水の元素が大いなる大海のうねりと化して流れ込んでくる。潮が満ちるときのように冷たく清らかな感触が門をとおり、門の前に刻み込まれた五芒星と六芒星をくぐり抜け、群青の指を伸ばして門と祭壇を結びつけ、祭壇に水の霊が凝集する。」

ストリストリアは、北方を向き、アंकで「地旗」を指し、次を唱える。

S t : 「 N A N T A A N O A N N O N K P T A K A L A N P L A 」
(エン・アー・エン・ター アー ノー・アー・ネー ノー・エン・ケー・ペー
ター カー・レー アー・ネー ペー・ラー)

ストリストリアは、地の召喚の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

S t : 「見よ、不動の大地を。わが思いと情の結び合わさる地よ。
われ、地の門を開きたり。」

P t : 「神殿の北に注目されたい。物質の壁のすぐ後ろに、高さ約2メートル、幅約1メートルの黄金色の微光を放つ空間が地の門として開いた。その門の彼方から緑色の光の筋が幾本も差し込み門の中央に緑の光の球を造る。その輝きがストリストリア、すなわち大地の君主(貴婦人)を貫き、地の司官の全身は青い輝きに包まれる。その様子を心の目で見よ。
いまや、地の元素が圧倒的な存在感をもって忍び寄ってくる。大いなる平安と安定の感覚が門をとおり、門の前に刻み込まれた五芒星と六芒星をくぐり抜け、緑の指を伸ばして門と祭壇を結びつけ、祭壇に地の霊が凝集する。」

P t : 「されば祭壇に注目されたい。
東の風の門から、黄色の光が伸び、風を運ぶ。
南の火の門から、赤い光が伸び、火を運ぶ。
西の水の門から、青い光が伸び、水を運ぶ。
北の地の門から、緑の光が伸び、地を運ぶ。
神殿に呼び込まれた四大の霊気は、祭壇を中心に結び合わされ、
巨大な十字架を形成した。」

H t : 「四門は開放された。神秘なる周行を光と闇の小径に起こすべし。」

P t : 「竜の周行。
この神秘なる《竜の周行》により、上空から光の渦が、下方から闇の渦が召喚され、
祭壇を縦軸として、神殿全体を光と闇の二重螺旋のなかに包み込む。」

ヘゲモンが最初に右回りに動き始める。S、W、ストリストリアが追う。
神殿の東を通過するとき《ホルスのサイン》を円周上になし、ヘゲモンは、1回、ダドウコスは、2回、Wとストリストリアは、3回通過した後、自分の場に戻る。

H t : 「神秘なる周行は完成し、天の竜は降下せり。されば《宇宙の主》を讃えん。」

P t : 「宇宙の主の讃歌。
参列者は全て東を向いてお立ち下さい。
ハイエロファントの言葉と動作に合わせ宇宙の主を礼拝します。」

全員が東を向き、主への讃歌を唱える。
A l l : 「聖なるかな汝、宇宙の主よ! (ホルスのサイン)
聖なるかな汝、自然の造らざる者よ! (継続)
聖なるかな汝、広大にして強大なる者よ! (継続)
光と闇の主よ! (ハーポクラテスのサイン)」

第3章 夏至の祝祭

H t : 「われら夏至点を祝祭せん。」

P t : 「諸神の召喚」

ハイエロファントは、南に面する。

H t : 「ここに《生まれなき》者を召喚せん」

ハイエロファントは、《竜の十字》を切る。

H t : 「われ汝を召喚す、生まれなき者よ。

汝、地と天を造りし者よ。

汝、昼と夜を造りし者よ。

汝、闇と光を造りし者よ。

汝は、完全者たるわれなり、何人もかって目にせぬ者なり。

汝は、イア ベズ ペー。

汝は、イア アポフラッツ ヨド。

汝は、正と不正を分かちたる。

汝は、女と男を造りたる。

汝は、種と果実を生みたる。

汝は、人を互いに愛しあい、憎みあうべく造りたる。」

H t : 「われはBGD。汝の密儀、すなわち光と闇の魔術を託されし、汝の予言者なり。

汝、湿と乾をあらわし、すべての生命を造り、育み、滅ぼすものなり。

汝、わが声を聞くべし。われは、無垢なる蒼穹の天使なればなり。

こは、汝の預言者につけられし名前なり。」

ヘゲモンは、東を向いて立ち、東の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なネフティス女神の立像を視覚化する。意識の焦点を女神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

H g : 「わが声を聞け、HRV - RA - HA !

汝、恐るべき不可視の神よ。

汝、霊の虚の場所に住まう者よ。

汝は、人の姿を取りし蛇なり。

汝は、宇宙を調停する者なり。

汝は、神殿の支配者なり。

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。

されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、

陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、

われに服従せしめん。」

ダドウコスは、南を向いて立ち、南の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なセト=テユフォーン神の立像を視覚化する。意識の焦点を神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

D d : 「わが声を聞け、APV - PRSh !

汝、恐るべき不可視の神よ。

汝、霊の虚の場所に住まう者よ。

汝は、否定する霊なり。

汝は、真夜中の天空なり。

汝は、苦き知恵の支配者なり。

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。

されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、

陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、

われに服従せしめん。」

ハイエレイアは、西を向いて立ち、西の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なイシス女神の立像を視覚化する。意識の焦点を女神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

H r : 「わが声を聞け、A S T h - R N N V T h !

汝、恐るべき不可視の神よ。

汝、霊の虚の場所に住まう者よ。

汝は、宇宙の母なり。

汝は、全き闇なり。

汝は、魔術の支配者なり。

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。

されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、

陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、

われに服従せしめん。」

ストリストリアは、北を向いて立ち、北の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なオシリス神の立像を視覚化する。意識の焦点を神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

S t : 「わが声を聞け、A S R - V N - N P R !

汝、恐るべき不可視の神よ。

汝、霊の虚の場所に住まう者よ。

汝は、死して再び甦りし者なり。

汝は、大地を肥沃にする者なり。

汝は、黄泉の支配者なり。

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。

されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、

陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、

われに服従せしめん。」

ハイエロファントは、祭壇の北から南に面して両手を広げ祭壇に主神を召喚する。

H t : 「われ、汝を召喚す、生まれなき者よ！

汝、恐るべき不可視の神よ。

汝、霊の虚の場所に住まう者よ。

汝は、M T h R - N A B A R Z、牛を屠ふる獅子なり。

汝は、Z R V A N A - A K A R N A、無限の時間なり。

汝は、A L M N H T z V R、岩から出る神なり。

汝は、世界の心臓にして、叡知の光なり。

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。

されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、

陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、

われに服従せしめん。」

D d : 「これは神々の主なり。

これは宇宙の主なり。

これは風の恐れる者なり。

これはその命により声を造りし、万物と無の支配者なり。」

H t : 「わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。

されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、

陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、

われに服従せしめん。」

S t : 「われは汝のもとに行かず、汝がわがもとに来たれり。
星と、夜と、稲妻の彩る空間に、
汝がいずこをさまようとも、常にわがもとに帰り来たり。
われは天の空虚に住まえり。
汝がこの座所を訪れしとき、汝はまさに知る。
炎と煙の柱をとおして、汝は上り、また下りぬ。
不死鳥のごとく、翼は焼かれ、また蘇る。
そは汝の真実の名なり。」

H t : 「われはかれなり、生まれなき者なり。足元に目をもつ者なり。
強大にして不滅の火なり。
われはかれなり、真実なり。
われはかれなり、世界に悪のはびこるを厭う者なり。
われはかれなり、稲妻を発し、雷鳴を轟かす。
われはかれなり、地に生命の雨を降らしたり。
われはかれなり、口より火を発する者なり。
われはかれなり、子を造り、光へと顕現する者なり。
われはかれなり、世界の恩寵なり。
蛇をまといし心臓こそ、わが名前なり。
汝、来たりてわれに従い、すべての霊をわれに服従せしめよ。
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、
われに服従せしめん。イアオ、サバオ。かくのごとき言葉なり。」

P t : 「内なる神殿に《無敗の獅子》は降臨せり。
夏至は到来せり、宇宙の主を称えん」

H g : 「宇宙の主を称えん。
聖なるかな、汝、風の主よ。
蒼穹を創りしものよ、来たりて夏至を祝せよ。」

D d : 「宇宙の主を称えん。
聖なるかな、汝、火の主よ。
栄光の座を示すものよ、来たりて夏至を祝せよ。」

H r : 「宇宙の主を称えん。
聖なるかな、汝、水の主よ。
創造のとき深淵の面を歩きしものよ、来たりて夏至を祝せよ。」

S t : 「宇宙の主を称えん。
聖なるかな、汝、地の主よ。
自ら座すべき大地を造りしものよ、来たりて夏至を祝せよ。」

H t : 「宇宙の主を称えん。
聖なるかな、汝、万物を生みしものよ。
新羅万象は、汝のなかにあり、
わが右手を天に伸ばせば、そこに汝あり、（右手を上）
わが左手を冥府に伸ばせば、そこにも汝あり、（左手を下）
わが腕を組めば、そこにも汝あり。（腕を組む）

汝のものは、躍動する《風》なり。(東面)
汝のものは、燃える炎の《火》なり。(南面)
汝のものは、満ち引きする《水》なり。(西面)
汝のものは、堪え忍び定まる《地》なり。(北面)
わが心臓の光輪は回転せり、来たりて夏至を祝せよ。(再度、南面)」

H g : 「 I 」 - - - H t : 「 Ipsissimis Isis 」
H r : 「 A 」 - - - H t : 「 Ad Astra Apophem 」
S t : 「 O 」 - - - H t : 「 Omnes Omnium Osiridem 」
D d : 「 I A O (イ イ イ イ ー ・ ア ア ア ア ー ・ オ オ オ オ ー) 」

ハイエロファントは、祭壇から離れ、南に行く。

それぞれの方位の壁に面したE、W、Nの三司官は佇立したまま、神殿を囲む魔法円を青白い炎の円環として視角化し、その魔法円に意識と意志を投射して、炎を激しく燃え盛らせ、神殿内部が完全な結界として存在するように強化せよ。(四大の門はそのまま)

ダドウコスは、炎の魔法円の南端に「火の門」を強く視角化し、そこから熱く乾いた火のイメージが流れこむ様子を、意識と意志を総動員して誘導せよ。神殿の内部を刺激的で活発な火の霊気が徐々に満たしていく有り様を感じなさい。

H t : 「 汝、身を屈める竜、アポフラスズよ。
汝、オシリスを殺害せる者、スザザン・トゥフォンよ。
汝、残虐なる魔霊、バズスよ。
来たりて秘儀を開示せよ。 」

P t : 「 南の壁を注目されたい。壁の左にかけられた図は、ハイエロファントが召喚せる三重に巻く蛇、
邪悪なアポフィスが立つ《ゲヘナ図》である。かれは河馬の胴体に鱈の頭部、長大な蛇の尻尾をもつ怪物の姿で現される。その足は四つの水を横切る七つの地球と七つの地獄を踏みしだいている。これは南の方に投影された宇宙の影の領域でもある。 」

H t : 「 ダドウコスよ、アポフィスの門を開け。 」

ダドウコスは、南方を向いたまま、火の魔術武器を左手に持ち替え、その先端でアポフィスの描かれた《ゲヘナ図》に触れる。ダドウコスは、全身を貫く《火》の元素を杖を通して、《ゲヘナ図》に投射せよ。

P t : 「 しばし、《ゲヘナ図》に注目し、そのあと静かに座って、目を閉じて下さい。
座ったまま、身体力を抜いて下さい。リラックスの方法を知っている方は騒々しくない流儀で、身体抵抗を溶かして下さい。リラックスしながら、目を閉じたまま、周囲の様子を肌で感じて下さい。そして、わたしの言葉の作り出すイメージの世界に徐々に入り込んで下さい。意識の焦点は、南に向けられます。
さあ、あなたの前方、ダドウコスが立つ壁の方角が、ゆっくりと暗い朧な影に包まれ、神殿の壁が溶けていきます。もやもやした黒い雲のようなイメージがあなたの視野の全体を包み込みます。神殿の内部も、アポフィスの門を開いたダドウコスも消え失せます。そこには広い洞窟が見えます。深い岩の洞窟の内部に潜り込み、そのさらに深い奥を覗き込んでいます。石の洞窟は地下礼拝堂のような内装で覆われています。奥まった正面の壁には、人間ほどの大きさの切れ込みがあり、本来は神の像を入れる廊室だろうが、今は空である。その切れ込みは相当に深く、別な部屋でもあるのか奥が見えない。

どこからともなく烏の泣く陰気な声が響いてくる。切れ込みの彼方からほのかな月の光

が射してくると、鳥が羽ばたく音が聞こえる。あなたの左手から一人の男が進み出て、切れ込みの前に跪いた。かれは紫のマントをかぶり、頭部全体を覆う烏の仮面をつけている。その者は古代の神に仕える第1階級の信者である。かれの位階名は、ヒエロス・コクラス、《神聖なる大鳥》である。かれは《月》の力を運ぶ。

かれは紫色のマントを脱ぎ、内側の光輝く白衣を覗かせる。それは烏が一瞬に白鳥の翼を得たような不思議な光景である。黒い嘴が動き、《大鳥》の呟く声が聞こえる。

- ・・・われは肉体の器を脱ぎ捨て、さらに靈魂の外皮を剥いで、月の靈気からなる
- ・・・魂の幻想を《偽りの海》に流さん。わが左足は最初の地獄ゲヒンノムを、
- ・・・わが右足は最初の地球セベルを踏み越え、いと高き天空に舞いあがらん。

第1の位階の信者は、おぼろな白い光と湿気を残して、洞窟の奥の壁のなかに消えていった。そして、それと同時に世界を取り巻く《四つの水》のうち最外層の暗い水面が、洞窟の奥から押し寄せる冷たいうねりとなって、あなたの足下を通過する。冷気は一瞬で過ぎ去り、あなたは《偽りの海》を越えた。

次に聞こえてきたのは、笑いさんざめく娘たちの歌声である。どこから聞こえるのか、異国の言葉で歌う祝い歌が聞こえる。暗い切れ込みの奥から良く輝く小さな星が覗く。あなたの左手から今ひとりの女性が進み出た。彼女は豊かな亜麻色の髪に黄金細工のティアラをつけ、白い頬に紅を差し、華やかなオレンジ色のマントを纏っている。彼女は古代の宗教の第2の位階、クリュフィス、すなわち《隠れたる者》である。その花嫁衣装に似た装いをもってニンフス、すなわち《花嫁》と呼ぶ者もいる。彼女は《水星》の力を象徴するマントを脱ぎ捨て、内側の華奢な白衣を覗かせる。跪いたまま、彼女は歌うように唱える。

- ・・・わたしは肉体を捨てた靈魂なり。その魂の重りとなる水星の殻をふるい落とし、
- ・・・愚鈍なる分別と知識の欠片を虚無の上に散らさん。わが左足は第2の地獄、
- ・・・シャアリ・モスを、わが右足は第2の地球アレガを踏み越え、天に帰らん。

第2の位階の信者は、おぼろな白い光と微かな良い香りを残して、洞窟の奥に消えた。

次に聞こえて来たのは、金具の触れあう音である。重い動物が地面を踏み鳴らし、車輪が石を弾く音も聞こえてくる。これは戦場に向かう軍隊の音楽、埃臭い地上の騒音である。今ひとたびあなたの左手から、エメラルド色のマントを纏い漆黒の短い髪の上に花輪を乗せた屈強な男性が現れる。その額には未知の神の紋章が刻印され、かれは厳しい戦いの決意に唇を真一文字に結んでいる。第3の位階、ミレス、すなわち兵士と呼ばれる信者は王侯貴顕の前に控えるように片膝で跪いた。かれは《金星》を象徴するマントを脱ぎ捨て、朗々と述べる。

- ・・・われは肉体を捨てた靈魂なり。その足枷となる金星の狩衣を振り捨て、
- ・・・愛欲より自由とならん。わが左足は第3の地獄ツェルモスの上、わが右足は
- ・・・第3の地球ツィアの上から《大海の水》をひとまたぎに越え、蒼穹に戻らん。

第3の位階の信者は、おぼろな白い光と振動を残して、洞窟の奥の壁のなかに消えていった。そして、それと同時に世界を取り巻く《四つの水》のうち第2の重い水面が、洞窟の奥から押し寄せる脈動となって、あなたの足下を通過する。圧迫感は一瞬で過ぎ去り、あなたは《大海の水》を越えた。

次に聞こえてくるのは、重々しい猛獣のうなり声である。皮膚が逆立つような猛々しい気配が洞窟を満たす。正面の切れ込みから黄金色の光が幾筋か射したと思うと、真夏の

熱がちりちりと肌を焦がす。あなたの正面に黄金色のマントを纏い獅子の仮面をつけた第4の位階の信者が片膝をついている。その黄色い獣毛に覆われた後頭部から、夏の匂いと決して不快ではない獣の棲む草原の匂いがする。第3の位階名はレオ、獅子である。そのしなやかな肉体は女性の体型を明らかにする純白のうすぎぬで包まれ、彼女の脱ぎ捨てたマントが暗闇に一瞬、豪華な輝きを閃かす。

- ・・・わたしは肉体を捨てた靈魂なり。アストラルの心臓を取り巻く太陽の拘束を、
- ・・・今脱ぎ捨て、王権を放棄せん。わが左足は第4の地獄バル・シャチェオスを蹴り、
- ・・・わが右足は第4の地球ネシャを蹴り、虚無を越えて宇宙を飛翔せん。

第4の位階の信者は、おぼろな白い光と熱気を残して、洞窟の奥の壁に消えた。

次に聞こえてくるのは、異国のパイプ音楽である。葦の花から集めた蜂蜜の芳醇な香りが漂ってくる。あなたの右手から第5の位階に属する信者が、《火星》を象徴する真紅のマントを肩にかけ、異国風の帽子をかぶって現れる。マントを脱いだ下には、位階名ペルセス、すなわちペルシャ人を思わすたくさんの襷がついた白衣を纏っている。跪いたかれの口から言葉がこぼれる。

- ・・・われは肉体を捨てた靈魂なり。わが魂の外核を取り巻く猛々しき気配、
- ・・・マルスの靈気は既に脱ぎ落ちたり。わが左足は第5の地獄ティタヒオンを、
- ・・・わが右足は第5の地球ギアを後に銀河を駆けたり。創造の水は去れり。

第5の位階の信者は、おぼろな白い光と音楽を残して、洞窟の奥の壁のなかに消えていった。そして、それと同時に世界を取り巻く《四つの水》のうち第3の輝く水面が、洞窟の奥から押し寄せる光の波となって、あなたの足下を通過する。眩しい輝きは一瞬で過ぎ去り、あなたは《創造の水》を越えた。

次に聞こえてくるのは呼びかう声である。それは賛美歌のように澄んだ歌声にも似て、周り中から響いてくる。第6の位階の信者、ヘリオドロムス、すなわち《太陽神の使者》という位階の女性が鮮やかな青のマントを羽織って、あなたの右手から登場し、マントを払って、わずかな白布を巻き付けただけのほとんど全裸に近い豊かな肉体を誇示する。しかし、敬虔なそぶりで跪いた彼女は落ち着いた命令に慣れた声で宣言する。

- ・・・わたしは肉体を捨てた靈魂なり。わが魂の衣から豊穡の靈気を牽き剥ぎ、
- ・・・古き王座の欠片を虚無の上に投げ捨てん。わが左足は第6の地獄アバドンの
- ・・・わが右足は第6の地球アダマーの上を走り、月下界を後にせん。

第6の位階の信者は、おぼろな白い光と微細な気配を残して、洞窟の奥の壁のなかに消えた。

次に聞こえてきたのは祈りの声である。ラテン語で、ギリシャ語で、分からない古代の言葉で、そのかすかな祈りの声は無数の人間の敬虔な思いを乗せて、響いてくる。第7の、そして最終位階でもあるパテル・サクロルム、すなわち《秘儀の父》が黒いマントを纏って右手から現れる。かれはサトゥルヌス神を象徴する収穫の鎌を手に、灰色の髪の上に先端の曲がった帽子を乗せた老齢の男性である。《土星》の色のマントが脱ぎ捨てられ、枯れた肉体を覆う純白の法衣が現れる。かれは立ったまま、正面を向いた。

- ・・・われはパテル・パトラトゥス、すなわち《父たちの父》なり。
- ・・・わが背後に第7の地獄シェオルと第7の地球アレッツは過ぎ去り、
- ・・・涙の水の輪を越え、深淵の奥津城と蒼空の天蓋は打ち砕かれ、通底せり。

- ・・・わが靈魂は、七つの惑星の影響を拭い去り、輝ける光となれり。
- ・・・われは宇宙の中心にあり、完全に自由なり。

第7の位階の信者は、爆発的な光のなかに消えた。世界を取り巻く《四つの水》のうち最後の内奥の輪である苦い水が、洞窟の奥から押し寄せる氷の破片となって、あなたの足下を通過する。あなたは《涙の水》を越え、アポフィスの呪縛を超越した。アポフィスの門が閉じる。参列者は目を開いて下さい。」

H t : 「ダドウコスよ、アポフィスの門を閉じよ。」

ダドウコスは、左手の魔術武器を引き、《ゲヘナ図》との回路を切る。杖を胸の中央に両手で垂直に捧げ持つ。

H t : 「汝、大いなる竜、ティフォーンよ。
汝、光と闇の支配者、レレクよ。
汝、天をまたぐ者、セトよ。
来たりて秘儀を開示せよ。」

P t : 「南の壁を注目されたい。壁の右にかけられた図は、ハイエロファントが召喚せる三重に威武を放

神セトの心臓を表す《七宮殿図》である。かれはセトの動物として知られる奇怪な形の頭部と、七つの小円のなかに十の円を隠し、神の42文字の名前、すなわち、
 ア-ブ- キ- テ-ウ ケラシエヌ- ケゲテイク-シュ ハムラツカク-
 A B G I T h T z Q R O S h M N K G D I K S h B M R T z T h G
 ハラムナ- ヤグレブツク シエキ- アイス-
 H Q M M N O I G L P Z Q S h Q I O I T h を記された心臓をもつ姿で現される。その周囲の色彩はセフィロトの十色に対応し、線分は七つの惑星に対応する。」

H t : 「ダドウコスよ、セトの門を開け。」

ダドウコスは、南方を向いたまま、火の魔術武器を右手に持ち替え、その先端でセトの描かれた《七宮殿図》に触れる。ダドウコスは、全身を貫く《火》の元素を杖を通して、《七宮殿図》に投射せよ。

P t : 「しばし、《七宮殿図》に注目し、そのあと静かに座って、目を閉じて下さい。座ったまま、身体力を抜いて下さい。先ほどと同様にリラックスし、目を閉じたまま、周囲の様子を肌で感じて下さい。そして、わたしの言葉の作り出すイメージの世界に徐々に入り込んで下さい。意識の焦点は、引き続き南に向けられます。さあ、あなたの前方、ダドウコスが立つ壁の方角が、ゆっくりと暗い臙な影に包まれ、神殿の壁が溶けていきます。もやもやした黒い雲のようなイメージがあなたの視野の全体を包み込みます。神殿の内部も、セトの門を開いたダドウコスも消え失せます。そこには再び広い洞窟が見えます。深い岩の洞窟の内部に潜り込み、そのさらに深い奥を覗き込んでいます。洞窟の奥は先ほどの様子と少し違います。長方形の切れ込みの位置に真紅の繻子のカーテンが引かれ、その手前に立方体に切り出した1メートル角の大理石を二つ積んだ祭壇が置いてあります。祭壇の上には大の大人が両手で抱えてもいっばいになるような巨大な銀の大盃が置いてあります。大盃には、なみなみと何かの液体が満たされており、甘い香りがここまで漂ってきます。やがて、あなたの右手から黒衣を纏うパテル・パトラトゥスが現れました。かれは純粋な黒の法衣に全身を隙なく包み込み、両手を前にし、指で舟形を作り、何かを捧げもっています。その手の中身は光でした。純粋な光が液体状に変化したものを厳かに運ぶと、

祭壇の大盃の上に手を傾け、光を注ぎこみます。かれは静かに宣言します。
・・・サトゥルヌスの光を加えん。敬虔なる魂に形を与えたまえ。
パテルは祭壇の右手に立つ。

次に青の法衣を纏うヘリオドロムスが進み出て、同じく慎重に捧げ持つ光を大盃に注いだ。
・・・ユピテルの光を加えん。人を導く魂に力を与えたまえ。
ヘリオドロムスは祭壇の右手、パテルのやや手前に位置する。

真紅の法衣のペルセスが進み出て、光を注ぎこむ。
・・・マルティスの光を加えん。勇気ある魂に形を与えたまえ。
ペルセスは、先人の左に位置する。

レオが黄金の法衣に包まれ進み出る。光を注いで曰く。
・・・アポロンの光を加えん。均衡と美を求める魂に幸いあれ。
レオは祭壇の手前に陣取る。

エメラルド色の法衣のミレスが進み出て、光を注ぐ。
・・・ヴェヌスの光を加えん。無私なる愛に満ちた魂に力を与えたまえ。
ミレスは祭壇の左手前に位置した。

オレンジ色の法衣のニンフスが進み出て、光を注ぐ。
・・・メルクリウスの光を加えん。知識を求める魂に形を与えたまえ。
ニンフスはさらに左奥に位置する。

最後にヒエロ・コクラスが鮮やかな紫の法衣を纏い進み出て、光を注ぐ。
・・・ヘカテとダイアナの光を加えん。流転する魂に祝福あれ。
コクラスは祭壇の左を固める。

祭壇を半円に囲んだ七つの位階の信者たちは、一斉に膝をつき、祭壇に頭を垂れた。二重立法祭壇に置かれた巨大な銀の大盃から、ほのかな白い炎がたち昇る。盃の少し上の空間にちらちらと瞬く火花が飛び交い、やがてははっきりとした黄金の火筈が回転し始める。それは見る見る拡大して、ひと抱えほどもある希薄な黄金色の炎の塊になった。暗い地下神殿の内部を脈動する光で埋め尽くす黄金の火球は、その大きさや、輝きを変えながら、銀の大盃から立ち昇る松明のように、ゆっくりと回転している。その黄金の光が吹き出す炎は、小さな火花を散らすのが、火花のいくつかはあなたのイメージの肉体にも届き、熱い湯を落としたように皮膚を焼く。そして、そのままアストラルのイメージを突き抜け、あなたの心臓に熱と惑星の純粋な霊の欠片を染み込ませる。痛いほど刺激的で、心臓を震わせる火花の感触を味わいなさい。

やがて祭壇の上でゆっくりと回転する炎の中心に強い光の核が現れる。それはダイヤモンドの輝きに似て、強い閃光を束ねたような煌めきである。七人の信者の祈りにより、黄金の炎はさらに浄化され、純粋なダイヤモンドの輝きに昇華する。この光はまだ十分な準備のできていない人間の思念体を強く刺激する。先ほどの金の火花とは比較にならない強い痛みがイメージの肉体の上を走る。その致命的なまでに純粋な光を遮断するように祭壇の手前に床から濃い雲がわき上がり始めた。それは重く床を這い、徐々にせり上がってくる。祭壇の手前で礼拝する信者たちが雲に隠れ、祭壇が隠れ、銀の大盃が隠れ、激しく燃えるダイヤモンドの炎が隠れる。そして、前方の地下神殿の壁すべてが隠れようとした刹那、神殿の奥の壁を隠した真紅の繻子のカーテンが中央から左右に引かれ、透明なルビーの閃光が束の間見えたような

気がする。だが、洞窟の床から湧きあがる濃い雲が全てを包み込み、あなたは直に何も見えなくなる。
セト神の啓示は終了した。セトの門が閉じる。参列者は目を開いて下さい。」

H t : 「ダドウコスよ、セトの門を閉じよ。」

ダドウコスは、右手の魔術武器を引き、《七宮殿図》との回路を切る。杖を胸の中央に両手で垂直に捧げ持つ。

H t : 「炎が立ち昇るごとく、
われらが靈魂も上昇すべし、
遙かなる低きエデンへと」

H t : 「夏至の到来とともに、われらの進めてきた全ての計画は慎重に行い、その企ての最盛期
を迎えるよう図らねばならない。ものごとの追い潮はこのとき満潮を迎え、あたかも時
が静止しているかに見える。時空の潮は次の方向に変換し、見た目には変わらぬもの
の僅かずつ退き始める。われらは引き潮に備えて準備を行わねばならぬ。これより後は企
てを成熟へと向かわしめ、冬に備えよ。」

P t : 「夏至点は通過せり。・・・聖餐をともにせん。」

(注：特別な儀式を行う場合は、この部分で行う。繋ぎ方は以下のとおり。
Pの「夏至点は通過せり。・・・をせんがため、・・・の儀式が執り行われる。」
・・・《儀式実施》・・・
Pの「・・・儀式は、終了せり、聖餐をともにせん。」)

ハイエロファントは、祭壇の西に立ち、赤灯に手をかざす。
H t : 「ヨド NEQUAQVAM VACVVM」

ハイエロファントは、杯のワインを飲む。
H t : 「ヘー LIVERTAS EVANGELII」

ハイエロファントは、薔薇を取り上げ香を嗅ぐ。
H t : 「ヴァウ DEI GLORIA INTACTA」

ハイエロファントは、パンに塩をまぶして食う。
H t : 「ヘー REGIS JUGUM」

ハイエロファントは、再度、薔薇を取り上げて言う。
H t : 「ヘゲモンよ。われ汝を招く。
われとともにこの薔薇の香を《風》の象徴として嗅ぐべし。」

ヘゲモンは、祭壇の東に立ち薔薇の香を嗅ぐ。次にハイエロファントは、Eの手を取り赤灯
に手をかざさせる。
H t : 「われとともに、この神聖なる《火》の温かさを感じるべし。」

ハイエロファントは、パンを塩にまぶして与え、
H t : 「われとともに《地》の象徴として、このパンと塩を食すべし」

ハイエロファントは、盃を取って与え、
H t : 「されば最後に、元素の《水》の聖別されし紋章として、
われとともにこの葡萄酒を飲むべし」

ヘゲモンは、退き、ハイエロファントは、祭壇の東に回り、南に面する。ダドウコスが進み出る。以後、同じプロセスでWとストリストリアに四大の象徴たる聖餐を与え、その後に儀典司官は、参列者を進ませる。

全員が聖餐を受け終わったら、Pが進み出て最後に食す。ハイエロファントは、祭壇の東から宣言する。

H t : 「われらが食せしものにより、われらに光を分かち与えたまえ。
宇宙の主を讃えん。」

A l l : 「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！ (ホルスのサイン)
聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！ (継続)
聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！ (継続)
光と闇の主よ！」 (ハーポクラテスのサイン)

第4章 閉式

H t : 「 I O S . . . の兄弟姉妹たちよ。神殿を閉じるわれを助けよ 」

P t : 「 水と火の浄化 」

H t : 「 ハイエレイアよ、神殿を水で浄化せよ。 」

ハイエレイアは、閉式と同じ動作をする。

H r : 「 神殿を水で浄化した。 」

H t : 「 ダドウコスよ、神殿を火で聖別せよ。 」

ダドウコスは、閉式と同じ動作をする。

D d : 「 神殿を火で聖別した。 」

P t : 「 諸神への賛辞。 」

H t : 「 宇宙を領したまう《不敗の獅子》に感謝せん。

時間を刻むもの、Z R V A N A - A K A R N A よ、時空の彼方に戻りたまえ。 」

S t : 「 黄泉を領したまう《死して再び蘇る神》に感謝せん。

大地の領主、A S R - V N - N P R よ、霊の虚の場所に戻りたまえ。 」

H r : 「 魔術を制したまう《黒き女神》に感謝せん。

海の貴夫人、A S T h - R N N V T h よ、霊の虚の場所に戻りたまえ。 」

D d : 「 苦き知恵を制したまう《灼熱の試練を下す神》に感謝せん。

虚空の領主、A P V - P R S h よ、霊の虚の場所に戻りたまえ。 」

H g : 「 神殿を領したまう《白き女神》に感謝せん。

涼風の貴夫人、H R V - R A - H A よ、霊の虚の場所に戻りたまえ。 」

H t : 「 神秘なる逆周行を光の小径に起こすべし。 」

P t : 「 竜の逆周行。

この神秘なる《竜の逆周行》により、祭壇を軸として上下に絡み合った光と闇の二重螺旋が分離し、光の渦は上方に、闇の渦は下方に去って行く。 」

ヘゲモンが最初に左回りに動き始める。N、W、ダドウコスが追う。

神殿の東を通過するとき《ホルスのサイン》を円周上になし、ヘゲモンは、1回、ストリストリアは、2回、Wとダドウコスは、3回通過した後、自分の場に戻る。

H t : 「 光の逆周行は完成し、天の竜は上昇せり。されば《宇宙の主》を讃えん。 」

P t : 「 宇宙の主の讃歌 」

全員が東を向き、主への讃歌を唱える。

A l l : 「 聖なるかな汝、宇宙の主よ！ (ホルスのサイン)

聖なるかな汝、自然の造らざる者よ！ (継続)

聖なるかな汝、広大にして強大なる者よ！ (継続)
光と闇の主よ！」 (ハーポクラテスのサイン)

P t : 「四門の閉鎖」

P t : 「神殿の北に注目されたい。ストリストリアがエノク語の呪文を唱えると同時に、祭壇から地の

門に向かい平安と安定の感覚が押し戻されていく。黄金色の門の彼方、地の霊が本来所属すべき世界に、緑色の光の筋が幾本も矢のように吸い込まれていくだろう。かれが追儼の五芒星と六芒星を描ききった瞬間に、地の門は上下左右から一種に折り畳まれるようにして、消滅する。

これら全てを心で見よ。」

ストリストリアは、北方を向き、アंकで「地旗」を指し、次を唱える。

S t : 「NANTA A NOAN NONKP TA KAL AN PLA」
(エン・アー・エン・ター アー ノー・アー・ネー ノー・エン・ケー・ペー
ター カー・レー アー・ネー ペー・ラー)

ストリストリアは、、地の追儼の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

S t : 「見よ、不動の大地を。わが思いと情の結び合わさる地よ。
われは、地の門を閉じた。」

P t : 「神殿の西に注目されたい。ハイエレイアがエノク語の呪文を唱えると同時に、祭壇から水の

門に向かい急速に潮が引き始める。オレンジ色の門の彼方、水の霊が本来所属すべき世界に、青い光の筋が幾本も矢のように吸い込まれていくだろう。かれが追儼の五芒星と六芒星を描ききった瞬間に、水の門は上下左右から一種に折り畳まれるようにして、消滅する。

これら全てを心で見よ。」

ハイエレイアは、西方を向き、杯で「水旗」を指し、次を唱える。

H r : 「HKOMA KNILA O IODI M L DO T AAI TA」
(ヘイ・コー・マー ケー・ニー・ラー オオー イイー・オオー・ディー
エム エル ドオー テー アアー・アアー・イイー タアー)

ハイエレイアは、水の追儼の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

H r : 「見よ、ざわめく海を。わが真実の名前が漂う、わが内部の血潮よ。
われは、水の門を閉じた。」

P t : 「神殿の南に注目されたい。ダドウコスがエノク語の呪文を唱えると同時に、祭壇から火の

門に向かい熱と光が反射される。緑色の門の彼方、火の霊が本来所属すべき世界に、赤い光の筋が幾本も矢のように吸い込まれていくだろう。かれが追儼の五芒星と六芒星を描ききった瞬間に、火の門は上下左右から一種に折り畳まれるようにして、消滅する。
これら全てを心で見よ。」

ダドウコスは、南方を向き、杖で「火旗」を指し、次を唱える。

D d : 「BITOM IA IAL T IADP OAD PR MLPRG」
(ビー・トオー・エエム イイー・アアー イイー・アアー・レー ター
イイー・アアー・デー・ペー オー・アアー・デー パーアル)

エム・レー・パール・ゲー)

ダドウコスは、火の追讎の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

D d : 「見よ、逆巻く炎を。主の御手にほむらは戯れ、真実を糧に輝く。
われは、火の門を閉じた。」

P t : 「神殿の東に注目されたい。ヘゲモンがエノク語の呪文を唱えると同時に、祭壇から風の

門に向かい激しい風が吹き戻す。紫色の門の彼方、風の霊が本来所属すべき世界に、黄色い光の筋が幾本も矢のように吸い込まれていくだろう。かれが追讎の五芒星と六芒星を描ききった瞬間に、風の門は上下左右から一種に折り畳まれるようにして、消滅する。これら全てを心の目で見よ。」

ヘゲモンは、東に面し、短剣で「風旗」を指し、次を唱える。

H g : 「EXARP XFA IO AAI TI RIT OL POLIP」
(イクス・アール・ペー イクス・ファー イー・オオー アアー・アアー・イー
ティー リー・テー オオー・レー ポオー・イー・レー・ペー)

ヘゲモンは、風の追讎の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

H g : 「見よ、渦巻く風を。内奥にありしものは、慈悲と識見もて外側に開かれん。
われは、風の門を閉じた。」

ハイエロファントは、両手を目の前で左右から合わせる《ヴェールを閉じる》合図を行う。

H t : 「四門は閉鎖せり。

I H S h V H と I H V S h H の御名において、
この儀式に捕らわれしすべての霊を解放せん。」

H t : 「神殿作業は終了せり。神殿は閉場した」

P t : 「参加者退出」

参加者はヘゲモンを先頭に左回りに退出する。P が最後尾につく。M を残して全て退出した後、ハイエロファントは、小五芒星及び小六芒星の追讎儀式を行い神殿の魔術的磁気作用を中立化する。

その後も星幽的影響力が残存するのを認めた場合は所要の大儀礼で追讎する。

VERBORUM PUBLICA
I O S
RITUALE DE SOLSTITIUM

IMPRIMI POTEST: I O S
NIHIL OBSTAT QUOMINUS IMPRIMATUR
IMPRIMATUR : M.E.S.A. 5=6
MAIUS MCMXCV

夏至儀式

C I O S 1995
1995年5月15日 I O S 発行

本文書は、複数のまたは個人の会員が、魔術実践の練習のために使用するものであり、I O S の公式儀式手順書ではない。従って、本儀式を公に実施するテンプル、ロッジはその旨を会員に明確に告示する必要がある。しかし、それは同時に本文書を利用した会員の自由な実践活動を妨げるものではない。会員外の使用については、I O S の許可が必要である。本文書の著作権は団に所属する。本文書の内容の一部または全部を、団の文書による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、引用、転写することを禁じる。